

光の回廊2012 ―甦る古の記憶―

2012年9月15日～16日

光の回廊は、明日香村中がロウソクの優しい灯で包まれる毎年恒例の行事です。飛鳥資料館では今年、照明・映像・音響・ダンスを絡めた新たな演出を試みました。

会期の両日は、前庭で2,000個のロウソクに明かりが灯されました。さらに、資料館の建物は様々な色に変化するLEDによって鮮やかに彩られ、前庭の木々もライトアップされることで、飛鳥資料館が光の祭典の会場となりました。また、これまでに撮りためてきた、飛鳥の遺跡や奥飛鳥の自然等の美しい映像を会場で流し、資料館を包む心地よい音楽とあわせ、新たな飛鳥の空間を表現しました。

16日には、元格闘家の須藤元気さん率いるダンスユニット「WORLD ORDER」が出演しました。彼らのプロモーションビデオの撮影地には、世界の遺跡や歴史的建造物が選ばれる等、歴史との関わりが深いことが知られています。彼らのダンス・照明・映像が光の回廊とコラボレートし、前庭が幻想的な空間へと変貌を遂げました。16日の公演には1,500人以上の方にお越しいただき、公演後にはボランティアの両槻会とともにナイトミュージアムを館内でおこないました。終了後には、多くの方から飛鳥への興味、歴史・文化への理解の声、感謝の手紙等が寄せられ、光の回廊を通じて飛鳥の歴史や文化に親しんでいただけたと思っています。

当館は奈良文化財研究所の研究成果を公開するだけにとどまらず、今後とも幅広いお客様に、飛鳥に親しんでいただける場を創意工夫しながら作っていきたいと考えています。

(飛鳥資料館 成田 聖)



光の回廊2012の会場の様子

中央アジアの人々と遺跡を探る

カザフスタンはロシアの南、東は中国に接し、西はカスピ海に至る非常に大きな国です。シルクロードといえば、砂漠や荒野が続いているイメージですが、アルマティ空港に降り立つと、車や人の多さ、物資の豊富さは日本とあまり変わりがなく、その発展ぶりには目を見張ります。

9月18日から26日まで、東京文化財研究所に協力する形でユネスコ日本信託基金シルクロード支援事業による国際ワークショップに参加しました。奈良文化財研究所からは森本晋国際遺跡研究室長と私が参加し、中央アジア各国の研究者に遺跡探査の方法についての紹介と利用方法についての解説をおこないました。

今年はワークショップの2年目にあたり、カザフスタンでは機材を購入し、基本的な計測方法や解析の理解は充分でした。このため、初年度とは異なり、より実践的な内容を中心に、講義と遺跡での実際の計測を実施し、ソフトウェアによる解析や、成果についての討論をおこないました。地中レーダーは道路下の配管の確認から資源探査まで多くの分野で利用が進む技術ですが、遺跡の情報を得るためには、それにあった方法を確立する必要があります。ともに試しながら日本での経験を伝えることで、土地や対象に応じた方法を試行錯誤することの大切さを感じてもらいました。

参加者の多くは20～30代の若者達で、時間を超過しても質問攻めにあったのは昨年と同じでした。数年後、どこかで彼らの成果を拝見することを楽しみにしながら、彼らに笑われないように研究しないと、と気を引き締めて日本へ戻ってきました。

(埋蔵文化財センター 金田 明大)



カザフスタンにおける探査風景